

学生生活を通じた文化習得プロセス

— 1・2年次生の質問紙追跡調査の結果から —

大前 敦 巳*

(平成17年4月28日受付；平成17年6月15日受理)

要 旨

小論は、地方国立の上越教育大学と関西都市部の私立大学・短期大学の学生を対象に、2003年（1年次）と2004年（2年次）に実施した質問紙追跡調査に基づき、学生生活を通じていかなる文化習得を遂げ、そこにどのような社会的要因が関与しているかを検討した。1年次には幅広い文化領域に興味関心を示したのに対し、2年次に入ると自分に見合ったものを取捨選択する傾向が認められた。文化的取捨選択に関与する社会的要因について重回帰分析を行った結果、2年次に盛んに行われるようになった文化活動やスポーツは、社会的要因に強く規定されることなく、上教大では学校的な文化習得様式の間での違いがみられ、関西私大・短大では、家庭の物質的豊かさが学校的なものから離れた領域の活動を規定する傾向がみられた。

KEY WORDS

student life 学生生活 acquisition of culture 文化習得
cultural capital 文化資本 effect of schooling 学校効果

1. はじめに一分析課題

2004年に国立大学が法人化に移行し、私立大学を巻き込む形で個性と特色を競い合うことを推進する政策が導入され、大学界における競争的環境が醸成されつつある。中央教育審議会答申（2005）「我が国の高等教育の将来像」においては、大学の機能別分化という視点から、各機関の入学者選抜・教育課程・出口管理を明確化し、学位によって知識・能力を証明するという方向性が打ち出され、大学教育のあり方が個性・特色を定める上で一層重要視されている。

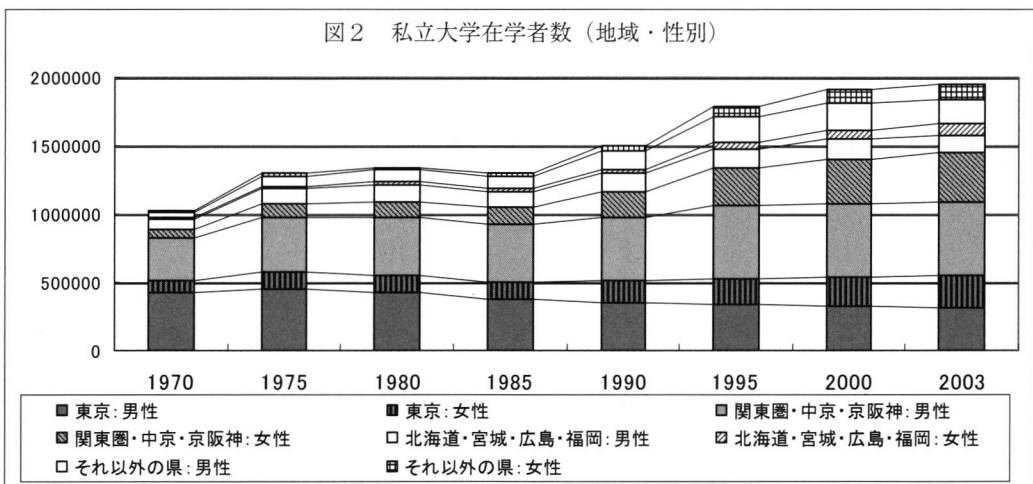
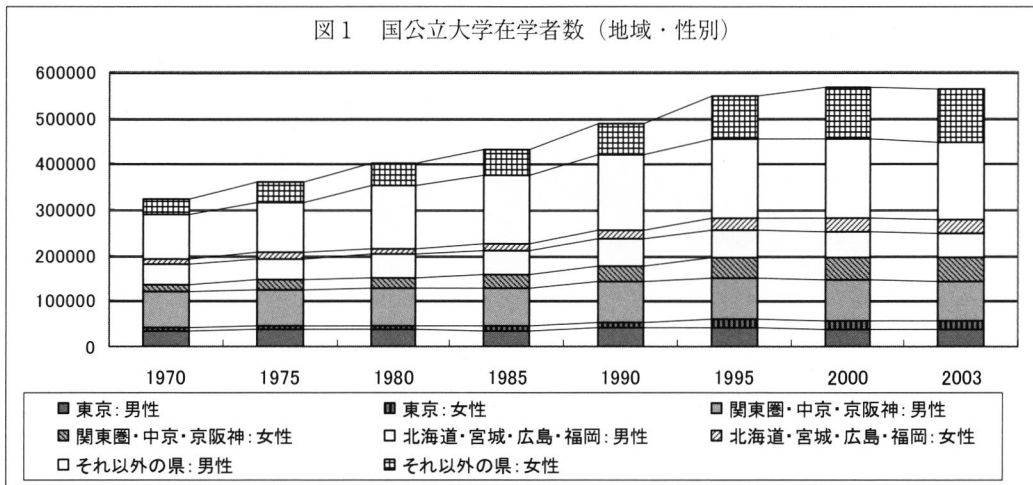
実際、これまで学部教育と呼ばれてきたものが学士課程カリキュラム、学士学位プログラムという名称に置き換えられ、その現況と問題点がすでに指摘されている（井門，2004，杉谷，2005）。正課教育の面では、国公立それぞれの立場から様々な特色づくりの実践が取り組まれ、その紹介がなされている（有本編，2003，清成・早田編，2005など）。ただ、課外活動を含めた学生生活や大学の社会的条件までも考慮に入れて議論したものは多くない（山内，2004など）。

当然ながら大学の個性・特色は、設置主体、立地、規模、学部学科組織、設立目的や建学の精神など、過去から存在する諸条件による影響を受ける。それを継承発展させることが特色づくりの基礎になるであろうと思われる。たとえば、国公立大学が医師、技術者、教員などの人材を計画的に養成し、広く地方に分散することで機会均等と地域貢献の役割を果たしてきた一

* 生徒指導総合講座

方で、私立大学が都市部を中心に多数の学生を吸収して高等教育の発展に貢献し、国際化や情報化など社会の変化に柔軟に対応した優れた人材を輩出してきたのは周知の通りである。

図1と図2は、学校基本調査より1970年から2000年までの5年毎と2003年における、国公立大学と私立大学の地域別・性別在学者数の推移をグラフに表したものである。国公立大学においては、政令指定都市のある12都道府県を除く県における学生数の増加が著しく（1970年11万人→2003年24万人）、特に女性の割合が高くなっている。私立大学になると、東京都では50万人前後で比較的一定した推移の中で女性の比率が高まっているのに対し、その周辺の埼玉・神奈川・千葉の関東圏および愛知・京都・大阪・神戸の府県で、学生数が大幅に増加していることがわかる（1970年37万人→2003年90万人）。



そのような設置主体による地理的分布の違いを勘案して、大前（2004）においては、地方国立の上越教育大学と関西都市部の私立大学・短期大学の1年次生を対象に質問紙調査を行い、

各大学・短大の学生生活条件と文化習得様式に次の特性があることを明らかにした¹⁾。①上越教育大学生は、広範な地方出身の者が親元を離れて大学近辺で集団生活を送り、クラブ・サークルを中心に緊密な友人関係の影響を受ける「大プレート型」の文化習得様式をもっている。②関西私立大学では、大都市周辺から自宅通学する学生が多く集まり、学内生活のみならず、各人の興味関心に応じて個別で幅広い友人関係を作り出す「小プレート型」の文化習得様式になっている。③関西私立短大では、将来の夢や目標に向かって2年間の多忙な生活をこなしつつ、大都市文化圏の若者の流行の影響を受けた余暇活動を送る生活様式を示している。

これらの特性の違いをふまえながら、小論では、2003年の1年次生調査に続き、さらに2004年—いずれも10～11月—に同じ対象の2年次生に実施した質問紙追跡調査の結果に基づいて、学生生活を通じていかなる文化習得が遂げられ、そこにどのような社会的要因が関与しているかを分析する。分析に用いるサンプルの構成一覧は、表1の通りである²⁾。

表1 「大学・短大生の生活と文化についての調査 2003～2004年」サンプル構成一覧

大学・短大名(略称)	1年次 在籍者数	1年次(2003年)有効 回答数(回収率)	2年次(2004年)有効 回答数(回収率)	1・2年次追跡 データ数(回収率)
上越教育大学(上教大)	168	106(63.1%)	139(82.7%)	83(49.4%)
関西私立大学(関西私大)	325	202(62.2%)	109(33.5%)	83(25.5%)
関西私立短期大学(私立短大)	179	166(92.7%)	159(88.8%)	132(73.7%)

2. 2年次における文化的取捨選択

はじめに1年次と2年次の全体の結果を比較することにより、各大学・短大における学生生活の変化を概観しておきたい。

学生生活の充実度について1～2年次の得点平均値の差をみると(表2)、上教大と関西私大では友人関係に力を入れる程度がやや低下した一方で、ボランティア活動の程度が高くなっている³⁾。また、上教大では授業よりもアルバイトに力を入れる傾向もみられる。私立短大では個人的な余暇活動にやや力を入れる傾向が高まっている。

表2 学生生活の充実度(力を入れている程度)

	上越教育大学		関西私立大学		関西私立短大	
	1年(2003)	2年(2004)	1年(2003)	2年(2004)	1年(2003)	2年(2004)
学生生活全般	3.16	3.01	2.93	2.82	2.97	3.03
大学・短大の授業	3.19	3.03 ⁺	3.01	3.02	3.04	2.90
学内のクラブ・サークル	3.27	3.24	1.94	1.83	1.26	1.27
学外のクラブ・サークル	1.49	1.50	1.63	1.76	1.20	1.28
個人的な余暇活動	2.93	2.86	3.03	3.00	2.85	3.02 ⁺
大学以外の学習活動	2.06	2.08	2.01	2.06	1.71	1.77
地域のボランティア活動	1.73	2.04 ^{**}	1.64	1.94 ^{**}	1.64	1.69
アルバイト	2.49	2.84 ^{**}	2.79	2.81	2.55	2.41
友人との関係	3.50	3.35 ⁺	3.46	3.28 [*]	3.46	3.45

「とても力を入れている」(学生生活全般の場合は「とても充実している」)を4点 ～ 「まったく力を入れない」(同じく「充実していない」)を1点とした場合の平均値

⁺p<0.1, ^{*}p<0.05, ^{**}p<0.01

いずれの大学・短大とも2年次生に入って大きな変化を示したのが、友人とのつきあい方である。図3・4に示したように、2年次になると、「多数の友人と幅広くつきあう」よりも「少数の友人と緊密につきあう」、「電話やメールでやりとりする」よりも「直接会って話をする」と答える比率が高くなる。どの大学・短大生においても、友人づきあいを気の合う少数に絞って、直接話すことによる個別的で緊密なつきあい方をするようになっていく。

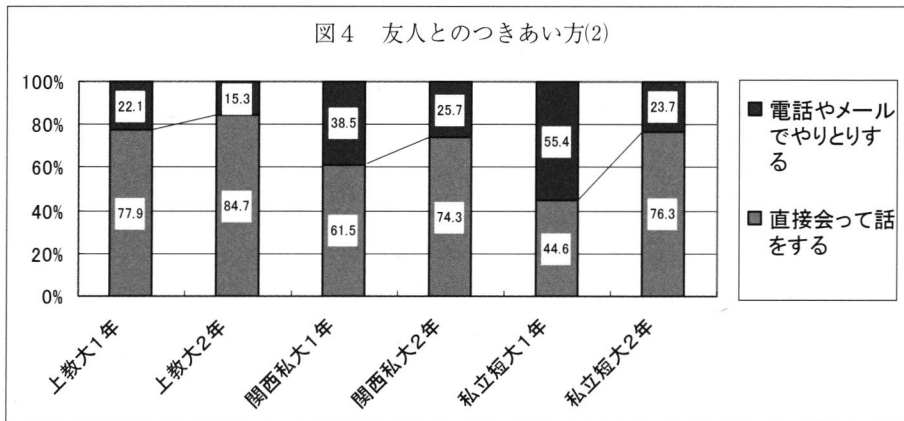
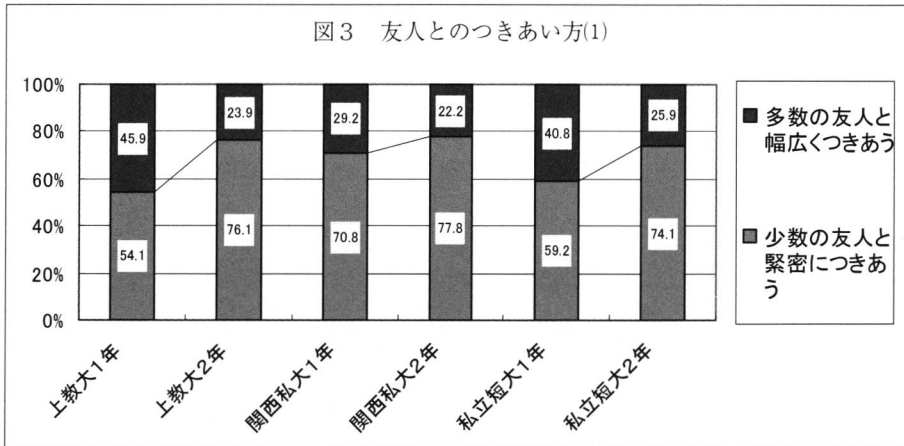


表3の文化活動を行う程度について1～2年次の得点平均値の差をみると、上教大ではクラシック音楽をはじめ、1年次に関心を示す傾向のあった古典趣味のポイントが低下している⁴⁾。それに対して、ジャズ・フュージョンやポップス・ロック、映画といった今日的な文化活動への興味関心が高まっている。関西私大においては、日本のポップス・ロックと日本の演劇・ミュージカルのポイントが2年次に上昇しており、国内の新しい音楽や芸能に関心を示す傾向がみられる。私立短大では、海外の演劇・ミュージカルへの関心が高くなり、映画、日本の演劇・ミュージカル、ストリートダンスなどの値も高く、大都市文化圏のもとで若者に流行の文化に接する程度が強まっている。いずれの大学・短大とも、授業やクラブ・サークルなどで学校的に獲得される文化活動よりも、そこから離れて都市文化やメディアに接触する中で得られるような活

動に向かう傾向がみられる。

表3 文化活動を行う程度（得点の平均値）

	上越教育大学		関西私立大学		関西私立短大	
	1年(2003)	2年(2004)	1年(2003)	2年(2004)	1年(2003)	2年(2004)
映画	3.22	3.34	3.44	3.49	3.49	3.61
日本のポップス・ロック	2.86	2.98	2.69	2.93*	2.51	2.50
アニメ・マンガ	2.34	2.33	2.49	2.32	2.36	2.28
海外のポップス・ロック	2.27	2.42	2.05	2.17	2.00	2.03
クラシック音楽	2.16	1.70*	1.21	1.29	1.08	1.01
文芸（小説・詩歌など）	2.04	1.88	1.71	1.62	1.22	1.25
合唱・コーラス	1.69	1.34	0.77	0.73	0.61	0.59
現代美術・絵画・版画	1.31	1.15	1.43	1.30	0.93	0.97
日本の演劇・ミュージカル	1.18	1.14	1.10	1.39+	1.19	1.37
海外の演劇・ミュージカル	1.05	1.08	0.79	0.85	0.82	1.17**
茶道・華道・書道	1.00	0.88	0.83	0.73	0.98	0.96
日本画・日本の陶芸や彫刻	0.93	0.75	0.93	0.82	0.45	0.56
ストリートダンス	0.86	0.95	0.91	0.83	1.24	1.37
日本の民謡・伝統音楽	0.86	0.73	0.56	0.67	0.68	0.66
ジャズ・フュージョン	0.80	1.12*	0.99	0.94	0.69	0.63
世界の民族・伝統音楽	0.79	0.81	0.75	0.69	0.45	0.53
グラフィック・デザイン	0.71	0.83	1.11	0.88	0.65	0.71
モダン・ジャズダンス	0.58	0.60	0.47	0.52	0.53	0.62
日本の演歌	0.56	0.35*	0.47	0.47	0.41	0.41
日本舞踊・能・狂言	0.56	0.65	0.51	0.60	0.33	0.32

*p<0.1 *p<0.05 **p<0.01

表4のスポーツを行う程度に関する得点平均値の差をみると、上教大では水泳をはじめ、バスケットボール、サッカー、テニス、野球など、体育会系の競技スポーツのポイントが低下している。ウィンタースポーツにおいては、スキーはポイントを下げているが、スノーボードに興味関心が向けられるようになっており、これも学校的なものから距離を置いた活動への指向性の高まりと考えることができる。

関西私大においては、上教大と同様にスノーボードの得点が高くなっているほか、体操・縄跳び、あるいはジョギングといった一人でできる運動が盛んに行われるようになってきている。他方で、バレーボールなどの球技のポイントが低下している。私立短大では、バレーボールなど軽度のスポーツを行う者が増えている。最終学年になって就職活動を重視する学生生活となる一方で、1年次に比べて実習やグループ討論などの多様な授業形態が取り入れられて、短大での授業の密度が軽減され、余裕が出てきたことを表しているのかもしれない。

表4 スポーツを行う程度（得点の平均値）

	上越教育大学		関西私立大学		関西私立短大	
	1年(2003)	2年(2004)	1年(2003)	2年(2004)	1年(2003)	2年(2004)
スキー	1.30	1.16	0.81	0.94	0.84	0.82
バスケットボール	1.28	1.11	0.97	0.84	0.84	0.96
バレーボール	1.24	1.34	1.02	0.74*	0.94	1.45**
水泳	1.16	0.87**	0.73	0.83	0.87	0.78
サッカー	1.11	0.96	1.06	0.94	0.67	0.61
テニス（硬式・軟式）	1.07	0.91	0.96	0.81	0.96	0.87
ジョギング	1.06	0.88	0.95	1.12	0.84	0.81
スノーボード	0.87	1.06 ⁺	0.71	0.94*	0.84	0.95
武道	0.83	0.66	0.52	0.66	0.27	0.29
野球（硬式・軟式）	0.83	0.68	0.88	0.84	0.62	0.55
スキューバダイビング	0.79	0.63	0.60	0.60	0.65	0.65
ハイキング・キャンプ	0.78	0.71	0.68	0.76	0.67	0.72
体操・縄跳び	0.76	0.76	0.54	0.75 ⁺	0.80	0.80
フットサル	0.75	0.70	0.76	0.73	0.39	0.36
ソフトボール	0.65	0.57	0.59	0.53	0.46	0.40
登山	0.55	0.50	0.48	0.55	0.41	0.39
フィットネス	0.45	0.53	0.50	0.58	0.56	0.59
サーフィン	0.41	0.33	0.37	0.34	0.46	0.51
ゴルフ	0.29	0.22	0.45	0.42	0.30	0.26

*p<0.1 *p<0.05 **p<0.01

このように、どの大学、短大においても1年次に幅広い文化領域に興味関心を示した後、2年次に入り自分に見合った友達づきあいや余暇活動を取捨選択する傾向が認められる。もっとも各大学・短大における文化習得様式の特徴が失われているわけではない。上教大では、2年次においても大多数がクラブ・サークル活動に参加し（上教大93%、関西私大42%、私立短大15%）、図書館に週1回以上行くと答えた者が60%にのほり（関西私大5%、私立短大4%）、学校的な文化習得様式が依然として支配的である。それに対して関西私大では、個人的な余暇活動に「とても力を入れている」と答える比率が37%と高く（私立短大28%、上教大22%）、個人主義的なライフスタイルをもつ傾向が強い。私立短大では、就職の必要性に迫られる一方で、85%がアミューズメントパークに月1回以上行くと答えるなど（関西私大70%、上教大43%）、学生としての楽しみや気分転換を享受するライフスタイルになっている。

問題は、各大学・短大に特徴的な文化習得様式の中で、学年が上がるにしたがって新たな変化をもたらしているのは、いかなる学生層においてであるかということである。上教大では学校的な文化習得様式から距離をとろうとする学生、関西私大では個人主義的な傾向をさらに伸長させている学生、私立短大では就職活動と余暇活動のバランスをうまくとっている学生は、どのような社会的特性を身につけているのだろうか。そうした点に着目することにより、学生

生活を通じた文化習得プロセスの様相をさらに明らかにしていきたい。

3. 文化習得の社会的要因

本節では、上記の文化的取捨選択に関与している社会的要因について、1～2年次の追跡調査データを用いて分析する。分析に用いた変数は、性別（女性ダミー）、高卒時居住地（県外出身ダミー）、15歳時家財（個室、パソコンなど10項目の合計点⁵⁾）、家庭教育経験（小学低学年、高学年、中学、高校時の有無の合計点）、習いごと経験（左と同じ）、塾・家庭教師経験（左と同じ）、高卒時学業成績（「とても良かった」～「良くなかった」の5段階）、調査時における学生生活の充実（「とても充実している」～「充実していない」の4段階）である⁶⁾。これらを独立変数にとり、表2で変化のみられた「大学・短大の授業」「個人的な余暇活動」「地域のボランティア活動」「アルバイト」「友人との関係」を従属変数に重回帰分析を行った。

上教大では、「地域のボランティア活動」以外は、調査時の学生生活の充実を除いて入学前の社会的要因に規定されることはなかった。「地域のボランティア活動」についてみると、県外出身で塾・家庭教師の経験が多く、調査時の学生生活が充実している者に担われる傾向がみられた（表5）。

関西私大における「地域のボランティア活動」は、学生生活の充実以外に家庭教育経験や習いごと経験が関与する傾向がみられる。また、「個人的な余暇活動」は、2年次に15歳時家財（家庭の物質的豊かさ）が正の効果をもっている（ $\beta = 0.252, p < 0.05$ ）。

私立短大になると、「地域のボランティア活動」は調査時の学生生活が充実に加えて、2年次に県外出身者に担われる傾向がみられる。家庭教育経験が関与する傾向がみられるのは「個人的な余暇活動」（1年 $\beta = 0.183, p < 0.05$, 2年 $\beta = 0.149, p < 0.10$ ）と「友人との関係」（1年 $\beta = 0.180, p < 0.05$, 2年 $\beta = 0.165, p < 0.05$ ）である。また、「アルバイト」は15歳時の家財が負の効果をもたらしている（1年 $\beta = -0.174, p < 0.1$, 2年 $\beta = -0.218, p < 0.05$ ）。

表5 地域のボランティア活動に関する重回帰分析結果

従属変数	上越教育大学		関西私立大学		関西私立短大	
	1年(2003)	2年(2004)	1年(2003)	2年(2004)	1年(2003)	2年(2004)
女性ダミー	0.153	0.092	-0.064	-0.024	-	-
県外出身ダミー	0.234*	0.222*	0.046	0.083	0.111	0.165*
15歳時の家財	-0.096	0.023	0.043	-0.044	-0.117	-0.031
家庭教育経験	-0.160	-0.050	0.198 ⁺	0.035	0.070	-0.008
習いごと経験	0.047	0.125	0.163	0.194 ⁺	-0.009	0.047
塾・家庭教師経験	0.222 ⁺	0.224*	0.156	0.120	0.079	-0.111
高卒時学業成績	-0.156	0.115	0.040	-0.034	-0.039	-0.018
学生生活の充実	0.260*	0.238*	0.267*	0.373**	0.212*	0.278**
R ²	0.200	0.223	0.195	0.262	0.071	0.107
調整済R ²	0.109	0.137	0.108	0.180	0.018	0.057
F値	2.193*	2.583*	2.246*	3.193**	1.341	2.122*

表中の数字は標準化された偏回帰係数 β ⁺p<0.1 ^{*}p<0.05 ^{**}p<0.01

続いて、文化活動とスポーツを従属変数にとって同様の分析を行ってみた。どの大学・短大の結果とも決定係数 (R^2) はそれほど高い値を示しておらず、分析モデルの当てはまりはあまりよくないが、複数項目を意味ある形でまとめて合計得点を算出したものを分析に用いた結果、次のような傾向を見出すことができる。

上教大では2年次に入り、野球・バスケットボール・バレーボールを合わせた「競技スポーツ」が、塾・家庭教師経験と負の関係にあり（および男性に多く行われる傾向がある）、先の「地域のボランティア活動」とは対極的な位置にあることがわかる(表6)。登山とハイキング・キャンプを合わせた「野外活動」をみると、調査時の学生生活の充実に加えて、家庭教育経験が正の効果をもっている。クラシック音楽や合唱・コーラスも同様の傾向を示している。したがって、上教大生が社会的要因によって規定される文化的取捨選択の主な方向性は、①県外出身で塾・家庭教師経験が多く「地域のボランティア活動」に向かうもの（受験優等生的な態度傾向が表れているのであろうか）、②塾・家庭教師経験が少なく（人口の少ない地方出身者が多いと思われる）「競技スポーツ」に向かうもの、③家庭教育経験が多く学生生活が充実し「野外活動」や「クラシック音楽、合唱・コーラス」などに向かうものに分かれてくる。これらはいずれも大学入学後の学生生活を通じて行われる点で共通しており、学校的な上昇志向に根ざした文化習得であるところに特徴がある。

2年次に入ってポイントの上昇したジャズ・フュージョンについては、有意差（10%水準の有意傾向を含めて）のある項目がみられず、スノーボードに関しては、15歳時家財のみが関与していた（ $\beta=0.257$, $p<0.05$ ）。これらの活動は、上記の学校的に獲得される文化活動やスポーツに比べれば、それほど強く社会的要因に規定されていない。

表6 文化活動とスポーツに関する重回帰分析結果（上越教育大学）

従属変数 独立変数	競技スポーツ	野外活動	クラシック・合唱
	2年 (2004)	2年 (2004)	2年 (2004)
女性ダメー	-0.206 ⁺	0.077	0.034
県外出身ダメー	-0.074	0.103	0.084
15歳時の家財	0.188	-0.033	0.021
家庭教育経験	0.020	0.266 [*]	0.194 [*]
習いごと経験	-0.087	0.037	0.027
塾・家庭教経験	-0.377 ^{**}	0.070	0.016
高卒時学業成績	0.143	-0.135	0.078
学生生活の充実	0.123	0.430 ^{**}	0.322 ^{**}
R^2	0.177	0.300	0.162
調整済 R^2	0.084	0.222	0.069
F 値	1.906 ⁺	3.859 ^{**}	1.745

表中の数字は標準化された偏回帰係数 β ⁺ $p<0.1$ ^{*} $p<0.05$ ^{**} $p<0.01$

関西私大においては、野球・バスケットボール・バレーボールを合わせた「競技スポーツ」は、習いごと経験による正の効果が見られ、上教大のように「地域のボランティア活動」と対極的な関係にはなかった(表7)。それに対し、クラシック音楽・海外のロックポップス・ジャ

ズ・フュージョンを合わせた「西洋音楽」をみると、15歳時家財が正の効果をもっており、家庭の物質的豊かさが個人的な余暇活動に影響を与えていることがわかる。これらの結果は、上教大のように2年次になって表れるのとは異なり、1年次から同じ傾向が続いているところに特徴がある⁷⁾。すなわち、「競技スポーツ」は、初等中等教育時代に習いごと経験のあった者が大学生活の中でも行う傾向があり、「西洋音楽」は、家庭の物的環境の違いが大学生活の中で差異化をもたらす活動のジャンルになっている。

関西私大で2年次にポイントの上昇した日本の演劇・ミュージカルは、女性であることが関与しており ($\beta = 0.389, p < 0.01$)、スノーボードは調査時の学生生活が充実していること ($\beta = 0.287, p < 0.05$)のみが関与していた(いずれも重回帰モデル自体の説明力はきわめて弱い)。体操・縄跳びに関しては、有意差のある項目はみられなかった。

表7 文化活動スポーツに関する重回帰分析結果 (関西私立大学・私立短期大学)

従属変数	競技スポーツ	西洋音楽	西洋ポピュラー音楽・ダンス
独立変数	関西私大2年	関西私大2年	私立短大2年
女性ダミー	-0.250 ⁺	-0.020	-
県外出身ダミー	0.220 ⁺	0.035	-0.011
15歳時の家財	-0.021	0.353 ^{**}	0.288 ^{**}
家庭教育経験	0.031	0.143	-0.053
習いごと経験	0.286 [*]	-0.110	0.126
塾・家庭教経験	-0.078	-0.016	-0.023
高卒時学業成績	0.109	-0.044	-0.046
学生生活の充実	0.172	0.172	-0.145 ⁺
R ²	0.210	0.181	0.126
調整済R ²	0.121	0.090	0.076
F値	2.362 [*]	1.986 ⁺	2.537 [*]

表中の数字は標準化された偏回帰係数 β ⁺p<0.1 ^{*}p<0.05 ^{**}p<0.01

私立短大において15歳時家財の効果がみられるのは、海外のロックポップスとモダン・ジャズダンスを合わせた「西洋ポピュラー音楽・ダンス」においてである。関西私大の場合とは、西洋文化の影響を受けた活動である点で共通しているが、より現代的かつ都会的で、若者の流行を指向するようなジャンルである点で異なっている⁸⁾。なお、日本の伝統文化である茶道・華道・書道と武道は、習いごと経験が関与する傾向があり、初等中等時代からの習いごとを継続する形で行うことが多いものと推察される。

私立短大でも、2年次にポイントの上昇した海外の演劇・ミュージカルは有意差のある項目がみられず、社会的要因に規定される程度は小さかった。バレーボールに関しては、高卒時の学業成績 ($\beta = 0.151, p < 0.1$) と調査時の学生生活充実 ($\beta = 0.154, p < 0.1$) が関与する傾向がみられ、学業面のアカデミックな生活に適応している学生に多く行われるようである。

以上の結果から、2年次に入って文化的取捨選択を行う指向性の違いについて、学生の社会的特性との関わりにおいて次のように整理することができる。古典趣味や競技スポーツに代表される学校的に獲得される文化領域に代わって、2年次に全般的に盛んに行われるようになった演劇・ミュージカルやスノーボードといった活動に関しては、特定の社会的要因に強く規定されることはなかった。学生に広く流行する形で興味関心を引きつけるジャンルにおいては、社会的な属性や過去の経験にかかわらず多くの学生に開かれる傾向がある。逆にそうであるがゆえに全体として盛んに行われるようになるのであろう。

社会的要因によって規定される傾向がみられるのは、全体としては1年次と変化していないように見える文化領域においてであった。地方国立の上教大では、クラブ・サークル活動を通じた学校的な文化習得様式が支配的であるが、「地域のボランティア活動」、「競技スポーツ」、「野外活動」を指向する学生の間には、社会的条件による違いが2年次になって表れるようになってきている。「地域のボランティア活動」と「競技スポーツ」は、初等中等教育時の塾・家庭教師経験の違いによって分かれ、「野外活動（およびクラシック音楽・合唱・コーラス）」は、家庭教育経験の多さに規定される傾向があった。

関西私大では、「地域のボランティア活動」と「競技スポーツ」に対し、クラシック音楽を含む「西洋音楽」が家庭の物質的豊かさに結びついて差異化をもたらしていた。私立短大において同様の効果をもっていたのが、モダン・ジャズダンスを含む「西洋ポピュラー音楽・ダンス」であった。関西私大・短大において、大都市部で主に西洋文化の影響を受けて学校的なものから離れた領域になると、家庭の物質的豊かさが大学生生活の場を経て獲得を促しているようである。

4. 学校効果の社会的・文化的基盤

これまでの分析結果から導かれる文化習得プロセスの特徴と問題点について、最後に若干の考察を試みたい。その参考のために、図5は、2年次に入って盛んになったり差異化が企てられた活動に着目して、各大学・短大における文化習得の特徴をあえて単純化して図式に表してみたものである（小さな円を随所に入れたのは、この図式—統計的に見出された結果—には当てはまらないタイプの学生が、当然ながら個別に多く存在することを示すためである）。

第一に、地方国立の上教大、関西都市部の私立大、2年制の女子短大の間では、それぞれ異なる文化習得様式をもっており、その様式の違い自体は2年次に入っても大きく変わるものではなかった。上教大は、学内のクラブ・サークル活動を中心とする「大プレート」型で、学校的な文化習得様式が支配的であり、関西私大は、個人的な余暇活動を中心とする「小プレート」型で、学内外の多様なつながりの中で活動が行われるところに特徴がある。私立短大は、就職の準備をする一方で学生としての楽しみを得ることを指向し、関西私大と同様に個人的な余暇活動中心であるが、大都市の若者に流行の文化に触れる傾向が大きい。

第二に、そのような文化習得様式の違いがみられる中で、2年次になると各大学・短大で活動の取捨選択を行いつつ、新しい指向性も見出されるようになった。とりわけ古典趣味や競技スポーツのような学校的に獲得される文化領域から、西洋音楽やスノーボードといった学校的なものから離れて個人的に楽しむことを求めるような領域が、全般的に盛んになっているといえる。

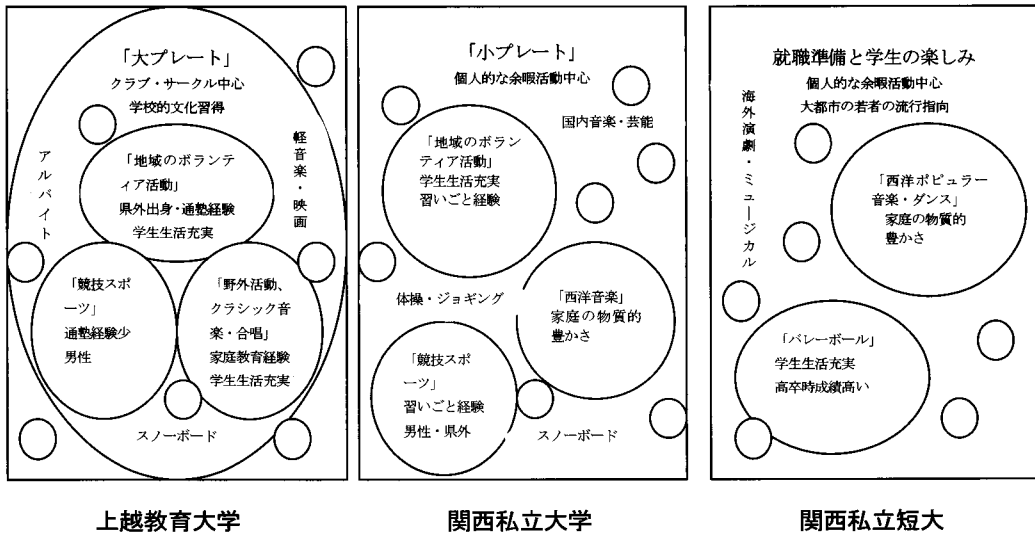


図5 2年次における文化習得の特徴

第三に、2年次における変化のあり方は、各大学・短大によっていくぶん異なる様相を示している。上教大では、学校的な文化習得様式の間で社会的要因による違いが生じるようになっている。関西私大と私立短大では、学校的な文化領域にかかわる学生層がみられる一方で、家庭の物質的な豊かさが、とりわけ西洋文化を指向する個人的な文化習得に結びつき、私立短大においてはより都会的で今日的な活動のジャンルに傾斜している。ところが、これらの活動は、家庭環境に規定されているとはいえ、フランスの「文化的再生産」の問題で言われるように、世代間の文化相続継承がなされるようなものとは異なっている。古くから伝えられる文化ではなく（古典的なものはむしろ学校的に習得される）、西洋の新しい文化を取り入れることは、家庭での親・祖母世代の影響以上に、実際に大学生活の中でそのような文化に触れる機会をもつことが重要になってくる。その意味で、どの大学・短大の文化習得プロセスにおいても、「キャッチアップ文化資本」（大前，2002）の獲得につながる学校効果が重要な役割を果たしていると考えられる。

したがって、このような文化習得プロセスの学校効果に着目することが、学生の教育にかかわる問題を考慮する上でも有効になるのではないかと筆者は考える。大学教育の個性・特色を發揮することが求められる中、その社会的・文化的基盤としての各々の大学に特徴的な文化習得のあり方を把握することにより、そこから学校効果を最大限に立ち上げる方策を考えることが一つの可能性として導かれるだろう。たとえば、松本（2005）は、国際化時代に対応した大学英语教育が、学生の内的動機づけを活性化する効果をもっていることを示している。そのような教育の取り組みも、学生の文化習得プロセスに合致したものになれば、大学での学習に対する知的興味関心の水準を引き上げることに資するものと考ええる。また、家庭の物質的な豊かさなどの社会的条件が、学生生活を通じて文化的な格差を作り出す傾向があるのだとすれば、その点をふまえた教育面での対応を施すことも課題になると考える。

他方、今日の社会情勢を反映して職業専門志向が強まる中、短期的な利得のみにとらわれな

い全人的で継続的な学習の場としての「大学」が維持困難な状況にあり、その背景には分科型の教育に傾斜した教員組織の問題があることが指摘されている（丹保，2005）。教育改革の一つ一つをみれば正しいものであっても、それらが全体として及ぼす構造的問題を考慮する視点に欠けていれば、分断された状況の中で個別対応ばかりが進んでいく矛盾に陥る危険性もある（アレゼール日本，2003）。分断を深めるだけの競争ではなく、長期的な視野から多様な個性・特色の発展が可能になるためにも、学校効果の社会的・文化的基盤に細心の注意を払っておく必要があると考える。

注

¹⁾ いずれも比較的新しい時期に設立された小規模の教育・福祉・人文系の学部・学科・専攻をもつ大学である。古い歴史をもつ伝統校とは異なり、過去の伝統や慣わしにあまり拘束されることなく、現代のニーズに応じた先駆的な教育実践を生み出すことを特色とする点で共通している。上教大では寮生活をする学生が多いが、全国的にも学寮が所得や生活費の低い層に開かれており、教育の機会均等の役割を果たしている点で（小林，2005）、地方国立大学の多少とも一般的な特性を示しているものと考えられる。

²⁾ 2年次生調査において、上教大と私立短大では、全員参加を原則とする機会（必修授業等）に調査を実施することができたため回収率は高かったが、関西私大では2年次の後期に必修の授業がなかったため、次の方法を用いた。選択履修ではあるが比較的大人数の授業の一部を割り当てていただいて集合調査を実施し、加えて、その授業を履修していない、または出席していない学生に対しては、別の授業時間の一部をお借りして調査票を配布し、回答後に郵便で返送してもらう方法を併せて用いた。その際、授業に出席していた学生だけでなく、授業に出席していないが調査に回答していない知り合いの学生がいれば、その学生の分の調査票も持ち帰ってもらった。結果的に、回収率は33.5%と低くなったが、2年次生のみで109名の有効回答者数を、追跡データも上越教育大学と同じ83ケースを得ることができたため、比較可能な人数であると考えられる。

³⁾ 上教大で調査を実施した日は、新潟中越地震が発生する前だったため、震災ボランティアに参加した学生は含まれないが、2004年7月に起きた新潟県三条市を中心とする水害により、被災地域の復旧のために大学がボランティアを募り、それに多数の学生が参加している。

⁴⁾ 得点の算出方法は、大前（2004）と同じく、「実際に活動を行っている」5点、「観客として見に行く」4点、「CD・ビデオ・本を通じて」3点、「テレビや雑誌を通じて」2点、「興味はあるが何もしない」1点、「興味がない」0点として得点化し、その平均値を求めている。また、表4のスポーツにおいては、「日常的に行っている」5点、「週1～2回程度行っている」4点、「月1～2回程度行っている」3点、「それより少ない程度」2点、「興味はあるが何もしない」1点、「興味がない」0点として得点化した平均値を算出している。

⁵⁾ 「あなたが15歳の頃、自宅に次のものがありましたか」の質問に、自分の個室、親子電話、ファックス、パソコン、ホームシアター、応接セット（ソファなど）ゴルフセット、ピアノ、百科事典、絵画・掛軸の10項目について回答してもらった。

⁶⁾ 調査時における学生生活の充実を独立変数に取り上げたのは、それ以外の独立変数である属性や過去の経験との対比において、調査時現在での学生生活状況が、文化活動やスポーツなどの文化習得に参与しているかを測定することを意図している。

⁷⁾ 関西私大の1年次生において同様の重回帰分析を行った結果、「競技スポーツ」を従属変数とする習いごと経験の偏回帰係数は $\alpha = 0.253$ ($p < 0.05$), 「西洋音楽」を従属変数とする15歳時家財の偏回帰係数は $\alpha = 0.348$ ($p < 0.01$) である。

⁸⁾ 実際、私立短大生は、「ファッションセンスにいつも気を配っている」「ブランド商品の流行に敏感なほうだ」の質問に、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答える比率が高くなる。前者1年次：上教大56%, 関西私大50%, 私立短大64%, 2年次：上教大51%, 関西私大51%, 私立短大66%。後者1年次：上教大17%, 関西私大10%, 私立短大24%, 2年次：上教大15%, 関西私大14%, 私立短大29%。

附 記

小論は、2003-2005年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）による研究成果の一部である。調査実施にご協力いただいた各大学・短大の先生方、および学生の皆様にお礼を申し上げます。

文 献

- 有本章編, 2003, 『大学のカリキュラム改革』, 玉川大学出版部。
 アレゼール日本編, 2003, 『大学界改造要綱』, 藤原書店。
 中央教育審議会, 2005, 『我が国の高等教育の将来像（答申）』。
 井門富二夫, 2004, 「学士課程カリキュラムの改革動向—学問と社会変動—」, 絹川正吉・館昭編, 『学士課程教育の改革』, 東信堂, pp.127-162。
 清成忠男監修・早田幸政編, 金沢大学大学教育開発・支援センター企画, 2005, 『国立大学法人化の衝撃と私大の挑戦』, エイデル研究所。
 小林雅之, 2004, 「高等教育の機会と寮生活の現状」, 『IDE 現代の高等教育』2004年8月号, pp.67-73。
 松本恵美, 2005, 「国際化時代に対応するための英語教育の可能性—動機づけを高めるための教育をめざして—」, 居神浩他著, 『大卒フリーター問題を考える』, ミネルヴァ書房, pp.155-174。
 大前敦巳, 2002, 「キャッチアップ文化資本による再生産戦略—日本型学歴社会における『文化的再生産』論の展開可能性—」, 『教育社会学研究』第70集, pp.165-183。
 大前敦巳, 2004, 「キャンパスの人間形成機能からみた現代の学生生活—上越教育大学と関西私立大学・短大の調査結果から—」, 『上越教育大学研究紀要』第24巻第1号, pp.45-58。
 杉谷祐美子, 2005, 「日本における学士学位プログラムの現況」, 『高等教育研究』第8集, pp.29-51。
 丹保憲仁, 2005, 「学習の体系と大学の構造」, 『IDE 現代の高等教育』2005年3月号, pp.40-54。
 山内乾史, 2004, 『現代大学教育論—学生・授業・実施組織—』, 東信堂。

Process of Acquisition of Culture through Student Life — An Analysis of Panel Survey Results of First and Second Year Students —

Atsumi OMAE*

ABSTRACT

The aim of this paper is to analyze a process of acquisition of culture through the student life, according to panel survey data of Joetsu University of Education (national and local) and private university and junior college of Kansai urban district in 2003 (first year) and 2004 (second year). While the first year students interested in various kinds of cultural activities, the second year students tend to select suitable ones for them. By using multiple regression analysis, we examined social factors of cultural choice. Effects of schooling make a differentiation of scholastic acquisitions of culture in Joetsu University of Education. In private university and junior college, material resources of descent family have an effect of making progress of less scholastic activities, such as Western popular music and dance.

* Division of School Guidance and School Administration